

サンタクロースの贈りもの

村 瀬 義 史

大学生の頃、アルバイトで「サンタクロース」になり、ある英会話教室のクリスマス会で子どもたちにプレゼントを渡したことがある。英語のあいさつで迎えてくれる子、笑顔で抱きついてくる子、遠巻きに見ている子、「トナカイ」を探しに行く子、疑いの眼差しを向ける子、「正体」を暴こうとする子など、登場した時の反応は様々だったが、それぞれの形でサンタクロースに対する思いを表現していた。プレゼントをもらう喜びが、未来には喜んで与える姿勢に結実する時が来ることを思い、嬉しかった。

ところで12月6日は、キリスト教のいくつかの教派で「聖ニコラウスの日」とされている。4世紀のミュラ（現在のトルコ）に実在したとされるニコラウス司教を記念する日で、この日、彼が貧しい人々や困難な状況にある人々を助け、ひそかに金銭や贈りもので援助した伝説にちなんで、愛の行為とひそかなプレゼントをする日になっている。また、彼は、サンタクロースのイメージ形成に一役かっており、聖ニコラウスのオランダ語「シンター・クラアス」がなまって、英語のサンタクロースになったことをご存じの人も多いだろう。

この季節、街のあちらこちらでサンタクロースが客寄せに使われ、クリスマスがあまりに商業主義的な香りを放っている場面を見ると少し悲しくなる。関西学院につらなる私たちはチャペルアワーや諸行事を通して、クリスマスの本来の意味を再確認しながら共にクリスマスを祝う。願わくは、ニコラウスと同様に、愛と祝福を人々に与えて生きたキリストにならない、ささやかであっても困難な状況に置かれている人に贈りものをすることができる者でありたい。そういう願いを自分の内に新たにしたい。金銭や物資を捧げることができるかもしれない。自分の時間や体力・知力を分かち合うこともできるかもしれない。短くても適切な言葉を贈ることもできるかもしれない。傍で相手に耳を傾けることも大きな贈りものである。プレゼントをもらうのも素晴らしいが、誰かの抱える寂しさや孤独をやぶる真心からのプレゼントをひとつでも贈ることができるならば、なんと幸いなことだろう。

寒さ厳しく夜の暗闇の長いこの季節に、表面的なもので終わらない、喜びとぬくもりと希望の光を、自分の心に取り戻す時を過ごしたいと思う。

（総合政策学部宗教主事）